

しかし 1941 年（昭和 16 年）世界情勢の悪化のため保一は妻子を帰国させます。結果的にそれが最後の船便となり太平洋戦争が勃発、1941 年（昭和 16 年）12 月 8 日午前 3 時前、保一は他の邦人男性 3,000 人とともに英軍に拘束され、音信不通となりました。

一方の神戸三宮の店舗では、戦争により貿易ができなくなりどうしていたのでしょうか。昭和 13 年と昭和 17 年の電話帳を見てみると取扱品目は“七宝焼徽章”となっています。また巖の妻・米子は生前「軍の階級章を売っていたが、金属が乏しくなり陶器製になった」と話していました。おそらく戦前・戦中の頃は三宮の店舗で“七宝焼きのバッジ”を製造販売していたのでしょうか。また兵隊の階級章とあわせて、需要の増した日の丸も売っていたのではないのでしょうか。このころの“バッジ・旗”という取扱品目が戦後の毛利マークの基礎となるのです。

戦況の悪化に伴い、巖は軍需工場に職を得て、家族とともに伊丹へ疎開します。また、保一の妻・きぬは夫が生死不明である上に息子まで病気で亡くしたため名古屋の実家へ引き上げました。三宮の店を離れるとき、巖と米子は店舗下の防空壕にたくさんの商品を埋めました。その後店舗は空襲で焼失しましたが、埋めておいたデミタスカップがひとつ無傷で残り、米子は生涯大切に仏壇にそなえていました。現在も店で保管しています。



亡くなった第 1 子の哲也



七宝焼のデミタスカップ